２０２５．１．５（日）使徒２１：１～６

21:1　私たちは、彼らと別れて船出した。コスに直航し、翌日ロドスに着き、そこからパタラに渡った。
21:2 そこにはフェニキア行きの船があったので、それに乗って出発した。
21:3　やがてキプロスが見えてきたが、それを左にして通過し、シリアに向かって航海を続け、ツロに入港した。ここで船は積荷を降ろすことになっていた。
21:4　私たちは弟子たちを探して、そこに七日間滞在した。彼らは御霊に示されて、エルサレムには行かないようにとパウロに繰り返し言った。
21:5　滞在期間が終わると、私たちはそこを出て、また旅を続けた。彼らはみな、妻や子どもたちと一緒に町の外まで私たちを送りに来た。そして海岸でひざまずいて祈ってから、
21:6 互いに別れを告げた。私たちは船に乗り込み、彼らは自分の家に帰って行った。

＜説教＞

この「使徒の働き」の学びの前回は、パウロがミレトスでエペソの教会の長老たちに最後のお別れの説教をしたところまでを見ました。別れる直前の様子が 20 章 36 ～ 38 節に記されていました。「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」とのパウロのことばに、エペソの教会の長老たちは特に心を痛め、皆が声をあげて泣き、パウロの首を抱いて何度も口づけして別れを惜しみました(37-38)。

そのようにエペソの教会の長老たちに見送られてパウロたち一行はエペソの港から船出しました。〈私たちは、彼らと別れて船出した〉(21:1)とルカは記します。この〈別れて〉の直訳は「引き抜かれて」「引き離されて」「引き裂かれて」ですから見送られる側の気持ちもよく表されています。〈コス〉はエーゲ海から地中海にちょうど出るところの島で、〈ロドス〉は地中海の島、そして〈パタラ〉は地中海に面した小アジア（現在のトルコ）の港町でした。

そのパタラに〈フェニキア行きの船があったので、それに乗って出発し〉ました(2)。〈やがてキプロスが見えてきたが、それを左にして通過し、シリアに向かって航海を続け、ツロに入港し〉ました(3)。こう書かれている航の道は、パタラからシリア州の一部で地中海に面したフェニキア地方まで地中海を一直線にいわば最短ルートで横断するものでした。パウロが〈できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいた〉(20:16)からでしょう。とは言え、船はさすがにパウロたちの貸し切りではありませんでした。フェニキアのツロで〈船は積み荷を降ろすことになってい〉ました(3)。そのためにも船は〈七日間〉(4)ほど停泊したのでしょう。

その間を利用してパウロたちは〈弟子たちを探し〉、弟子たちと交わりを持つことができました(4)。そもそもこの旅は初めから福音宣教のための旅でしたが、これまでも見て来たように、パウロたちの福音宣教には、途中に立ち寄った地の教会、キリスト者たちとの交わりも大事なこととして含まれていました。ここフェニキアでも彼らはそうしました。〈ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行った〉(11:19)と書かれていたように、フェニキアでもすでに福音が宣べ伝えられており、〈弟子たち〉がいました。そして第１回と２回の伝道旅行の

間、シリアのアンティオキアにいたパウロとバルナバ、そのほかの何人かが使徒たちや長老たちと話し合うためにエルサレムに上ることになったことが 15 章 2 節に書かれていました。続けて 3 節に〈こうして彼らは教会の人々に送り出され、フェニキアとサマリアを通って行った。道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした〉(15:3)とありました。このときに知り合いになった〈弟子たち〉もいたことでしょう。

さてその〈弟子たち〉ですが、〈彼らは御霊に示されて、エルサレムには行かないようにとパウロに繰り返し言った〉(4)のでした。エルサレムに向かっているパウロに対する最初の「引き止め」でした。そしてそれが〈繰り返〉されました。それだけ彼らは熱心にパウロに言ったのでしょう。なぜなら、彼らが〈御霊に示され〉たこととは、「エルサレムでパウロが捕らえられる」ということでした。エルサレムで〈鎖と苦しみ〉がパウロを待っている(cf.20:23)ということでした。だからツロの弟子たちは〈エルサレムには行かないようにとパウロに繰り返し言った〉のでした。エルサレムに行けば危ない目に会うことが分かっているのだから行ってはいけない、行かないようにと忠告し引き止めるのはキリストにある兄弟としては当然のこと、親切、思いやりだとと思ったのかもしれません。

「しかし」(新改訳第３版、口語訳など)とルカは言います。七日間の〈滞在期間が終わると、私たちはそこを出て、また旅を続けた〉(5)のです。もちろん、パウロ自身が頑としてそう言い張ったからです。そしてパウロにはそう言う当然の理由がありました。先にミレトスでエペソ教会の長老たちに語ったとおりです(20:22−24)。パウロこそ「自分は御霊に縛られてエルサレムに行くのであり、そこでどんな苦しみが自分を待っても、自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思わない」と聖霊の力による決断をしていました。更に遡れば、パウロはエペソで〈御霊に示され、マケドニアとアカイアを通ってエルサレムに行くことにした〉し、〈そこに行ってから、ローマも見なければならない〉と言っていました(19:21)。一方、ツロの弟子たちが〈御霊に示され〉たことは、(既に見たとおり)パウロが福音の故に、主イエスの名のために捕らえられ苦しめられるという事実でした。そして彼らが〈エルサレムには行かないようにパウロに繰り返し言った〉(4)のは、「そんなことになったら痛いし苦しいし恥ずかしいし、かわいそうだ」という「人情」「善意」によることであり、「御霊の示し」ではなかったのです。パウロにとって第一とすべきは人情や人の善意ではなく、ただ神の御意思、みこころでした。パウロの考えと行動の基準は、神の御意思、みこころでした。神のみこころを教える御霊の示しに背かず従うということでした。神の御意思こそは人間の情や善意に優って絶対であり、最善であることをパウロは知っており、信じていました。神がそのみこころによって自分に備えてくださった道を避けることなく忠実に歩むことを自分の任務としていました。

それは何と言ってもパウロの主、救い主、イエス・キリストが地上で歩まれた道でした。主イエスが、ご自分がエルサレムに行って長老たち祭司長たち律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを弟子たちにお話になったときにペテロがイエスを「とんでもない」といさめ始めると、イエスはペテロに言われました。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と(マタイ 16:21−23。マルコ 9:31−33)。パウロ

はこの神のみこころに従い十字架に向かって進まれた主イエス・キリストに倣い、顔をエルサレムに向けて、毅然として進んでいました(cf.ルカ 9:51)。

それで、ツロの弟子たちはもうパウロを引き止めようとはしませんでした。むしろ〈彼らはみな、妻や子どもたちと一緒に町の外まで〉パウロたちを〈送りに来〉てくれました(5)。彼らも神の御意思がなされることを願い、信じ、神のみこころに従うことを第一としました。〈そして海岸でひざまずいて祈ってから、互いに別れを告げ〉ました(5-6)。

私たちも、「神の御意思に従うことが大事なことは分かっている。でもそうすれば問題になる、困難になる、苦しい目に会う。それではわが子が親が友だちが（そして実は何よりも自分が）かわいそうだ」すぐにそんなふうに考えてこの世に合わせ、妥協してしまう、愚かで罪深い者です。改めて悔い改めつつ、何とか、どうにかして主なる神の御意思、みこころに従うことこそ第一、最優先として歩みましょう。自分をとおして、教会をとおして主のみこころがこの地上で行われることを目指して歩みましょう。